

IV-50 日本詩歌にみる音風景のとらえ方に関する研究

日本国土開発(株)○正会員 田代晃一

大阪大学 正会員 盛岡 通

大阪大学 正会員 城戸由能

1. 研究の背景と目的

現在われわれの周りの音環境を改めて見直してみても、あるいは、聞きなおしてみると、とても快適な環境であるとはいえず、逆に様々な問題を抱えていることに気がつく。その問題点は以下に述べる3点にあるといえる。

- ・道路交通騒音や航空機騒音などの生活を脅かす「騒音」の問題。
- ・街角で無造作に流されている呼び込みの音楽など垂れ流しにされている音の問題。
- ・これらの音環境の諸問題に対して無関心な人が多いという問題。

一方これらの音環境の問題を受けとめ、音環境を見直す動きが各方面でみられ音環境に対する関心が高まっていることがうかがえる。例えば、「花の万博」における「音の環境デザイン」や東京都練馬区の音の環境事業、そして「京都市観光基本計画」における「音の博物館構想」などが挙げられる。このような音環境を見直すきっかけをつくり、その動きを支えている音に関する概念として「サウンドスケープ(SOUNDSCAPE)」がある。

また、古来日本人は、虫の声を楽しんだり、風鈴の音によって夏の涼を得たりして音環境とうまくつきあっており、音に対して豊かな感受性が存在していたといえる。

このような背景を基に本研究では、今後音環境を新たに創造していくで、日本人の音に対する感受性を明らかにすることは有効であると考え、日本人の音風景のとらえ方の特徴を探ることを目的としている。

2. 日本詩歌を分析することの意義と視点

2-1 日本詩歌をテキストとする事の意義

本研究では、日本人の音風景のとらえ方の特徴を探るために、伝統的な日本の詩歌をテキストとした。伝統的な日本の詩歌とは、ここでは「俳句」や「和歌」だけでなく、「漢詩」や「歌謡」など、日本人に愛されてきた「うた」すべてをさす。音風景のとらえ方を探る上で、日本詩歌をテキストとする意義としては次の2点が挙げられる。

- ・とらえた音風景を表現するのに、「季語」や「枕詞」などの伝統的な「きまり」をふまえるため、詩歌の表現の中に伝統的な音風景のとらえ方が伝えられている。
- ・「うた」を詠むとき、対象のものやことに意識を集中して、眼や耳が敏感になっており、「うた詠み」によって、音風景を鮮やかにとらえることができる。

2-2 「音をとらえる」ことについて

本研究では、「音をとらえる」ことを「音を理解する(Appreciation)」という立場をとる。「Appreciation」とは『正しく評価すること、真価を知ること、美点を認めること』という意味である¹⁾。このことから、「音をとらえる」と言うことは、『音を理解することであり、音を「意味」づけたり、音に対してある「心境」をいだく』と定義づける。

また、音に対する「意味」や「心境」は、外的要因、あるいは内的要因によって変わり得る。その要因は、「場のコンテキスト」と呼ばれるものである。「コンテキスト(CONTEXT)」とは、『特定の事件、事柄、性格などに関係のある背景、状況』という意味である¹⁾。

2-3 日本詩歌を分析する視点

本研究では、分析対象は「日本詩歌」であるが、その中から「意味」「心境」「状況」の三つの点を明らかにし、その関連から音のとらえ方を探る。また、詩歌に取り上げられた音は、特に意識して聞かれている音であり、サウンドスケープを構成する「基調音」「信号音」「標識音」の内、「信号音」に当たるものとして分析を行う。

3. 日本詩歌にみる音風景のとらえ方の分析と結果

本研究で分析対象として選定した詩歌は、「折々のうた²⁾」とパンフレット「落柿舎³⁾」に収められているものである。「折々のうた」には、万葉の時代から、現代までの詩歌が収められている。一方「落柿舎」には、京都嵯峨野落柿舎に投稿された俳句が収められている。この分析の中で得られた音風景のとらえ方の特徴を以下に箇条書きで示す。

- (1) 全体的にみて「うた」に音が詠み込まれる割合は、約10%であり、このことから日本文化として音に対する感受性が存在することが分かった。
- (2) 「折々のうた」および「落柿舎」から「うた」の中に音が詠み込まれているものを抜き出した。そして、詠まれている音を「自然音」「生物音」「生活音」に分類し、その割合をみると生活の中の音よりも自然の中の音により耳を傾けていることが分かった。
- (3) 「落柿舎」の俳句には、「ししおどし」のような、生活の中にある、音を楽しむための「音響装置」が多数詠み込まれており、生活音を詠み込んだうたの中の約42%を占める。このことから、このような装置の出す音はその場のサウンドスケープの中で中心的な存在となり、さらに多くの人々に好まれている事が分かった。
- (4) 「うぐいすの声」には「春らしい」という意味を与えていたり、「秋風の音」には「さわやか」という心境を与えるなど、ある音風景に対して、多くの人が同じような感じ方をしていることが分かった。さらに、そのような音風景のとらえ方が現代の日本人にも受け継がれていることが「落柿舎」の分析結果から、明らかになった。（表1）
- (5) 「落柿舎」からは、現代になってあらわれた「電車の音」や「ヘリコプターの音」などの「機械音」がよみこまれており、このような、一般的には騒音とみなされている音に対しても「楽しむ」態度がとられている。このような音風景のとらえ方は、伝統的にはみられなかったものであり、新しい音風景のとらえ方であるといえる。（表2）

表1 現代に受け継がれている伝統的な音のとらえ方

種類	音	「意味」	「心境」
生活音	ししおどし	時間	風情がある
	鐘		風情がある
生物音	ほととぎす	夏である	さわやか
	せみ	夏である	
	うぐいす	春がきた	喜び
自然音	竹の葉ずれ		快い
	せせらぎ		快い

表2 「俳句」に詠まれている新しい音について

俳句	季	音	意味	心境
背の吾子は稲刈機の音聞ており	秋	農機		のどか
落柿舎に音の余りし耕運機	春	農機	春	ゆったり
柿若葉京の農機がゆるゆると	夏	農機	初夏	ゆったり
野宮の蔵ふるわせて列車過ぐ	秋	電車		
走り去る電車の音に母想う		電車		
寒林を断ち踏切のベルが鳴る	冬	踏切	寒さ	
ヘリコプター秋の嵯峨野のソエのよう	秋	ヘリコプター		邪魔

4. 研究のまとめ

本研究の分析結果から今後の音環境づくりに対するいくつかの提言を以下に箇条書きで述べる。

- (1) 現代に受け継がれている伝統的な音風景のとらえ方は貴重な財産であり、積極的に活用するべきである。また、そのような音風景が失われ、体験することが困難になることは避けなければならない。例えば、「春」を感じさせるサウンドスケープである「うぐいすの声」を聞くことができなくなったなら、それに対して音環境の修復を施すとともに、「うぐいす」が生きて行けるような自然環境を整えていくなど、他の環境と切り放して考えることはできず、併せて創造していくことが大事である。
- (2) 「落柿舎」の中に多く詠み込まれていた「ししおどし」のような生活の中の音を楽しむ「音響装置」は、音環境づくりにおいてひとつの方向性を示しているといえる。「ししおどし」のような「音響装置」は、横浜西鶴屋橋や有楽町マリオンのからくり時計のような現代都市における「音響装置」と同種のものであり、人々の関心を喚起させることができる装置である。このことから、現代都市において「音響装置」を積極的に創ることが、人々の音環境への関心を刺激し、さらに、良い音悪い音を判断できるようになり、よりよい音環境が形成される契機となる。

参考文献

- 1) ランダムハウス英和辞典, 小学館, 1973
- 2) 大岡信, 「折々のうた」, 第1巻～第9巻, 岩波新書
- 3) 落柿舎, パンフレット「落柿舎」